

「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」結果（概要版）

1. 調査の目的

本格的な高齢社会を迎え、高齢者が可能な限り住み慣れた地域社会で生活し、社会とのかかわりを持ち続けていくためには、その基盤となる住宅及び生活環境を高齢者の暮らしやすいものとするのが重要である。

そのためには、住宅を高齢者の身体機能の低下や高齢期の多様な居住形態に対応した構造、設備とするとともに、住み慣れた地域において、高齢者が必要とする様々な社会機能や安心して不自由なく外出、買物などができる環境の整備が必要である。

このような観点から、本調査においては、高齢者の住宅と生活環境に関する意識等を把握し、今後の高齢社会対策の推進に資することを目的としている。

2. 調査対象者、調査方法等

（1）調査対象者

全国の60歳以上の男女

（2）調査方法

調査員による面接聴取法

（3）調査事項

- ア 調査対象者の基本属性に関する事項
- イ 基本的生活に関する事項
- ウ 住宅・生活環境に関する事項
- エ その他に関する事項

（4）調査実施期間

平成22年11月4日～平成22年11月14日

（5）標本抽出法

層化2段無作為抽出法

(6) 標本数及び有効回収数

ア 標本数	3,000人
イ 有効回収数(率)	2,062人 (68.7%)
ウ 調査不能数(率)	938人 (31.3%)
エ 不能内訳	転居 48 (1.6%)
	長期不在 98 (3.3%)
	一時不在 228 (7.6%)
	住所不明 15 (0.5%)
	拒否 451 (15.0%)
	その他 98 (3.3%)

(7) 調査委託機関

社団法人 新情報センター

3. 調査の協力者

この調査は、内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付高齢社会対策担当が実施した。また、実施に際しては次の学識経験者の協力を得た。

狩野	徹 (岩手県立大学社会福祉学部教授)
鈴木	晃 (国立保健医療科学院健康住宅室長)
田中	直人 (摂南大学理工学部教授)
中村	文彦 (横浜国立大学大学院教授)
蓑輪	裕子 (聖徳大学短期大学部准教授)

4. 調査対象者の基本属性

性別・年齢階級別構成 (F1・2)

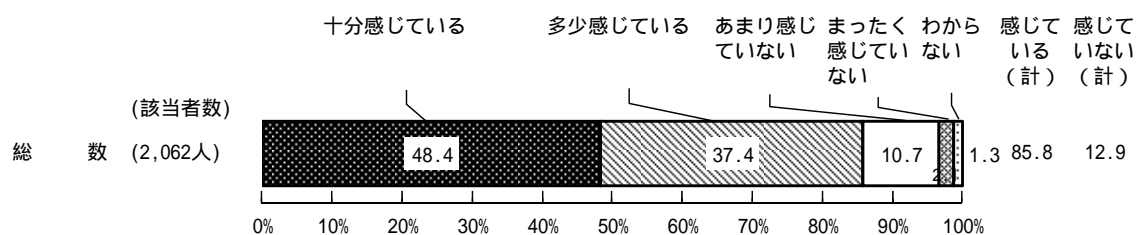
	性別			年齢階級別					
	総数	男	女	60~64歳	65~69歳	70~74歳	75~79歳	80~84歳	85歳以上
平成22年	2,062 100.0	979 47.5	1,083 52.5	574 27.8	500 24.2	457 22.2	322 15.6	147 7.1	62 3.0
平成17年	1,886 100.0	845 44.8	1,041 55.2	482 25.6	433 23.0	417 22.1	292 15.5	167 8.9	95 5.0
平成13年	2,226 100.0	1,017 45.7	1,209 54.3	535 24.0	670 30.1	523 23.5	322 14.5	124 5.6	52 2.3

5. 調査結果

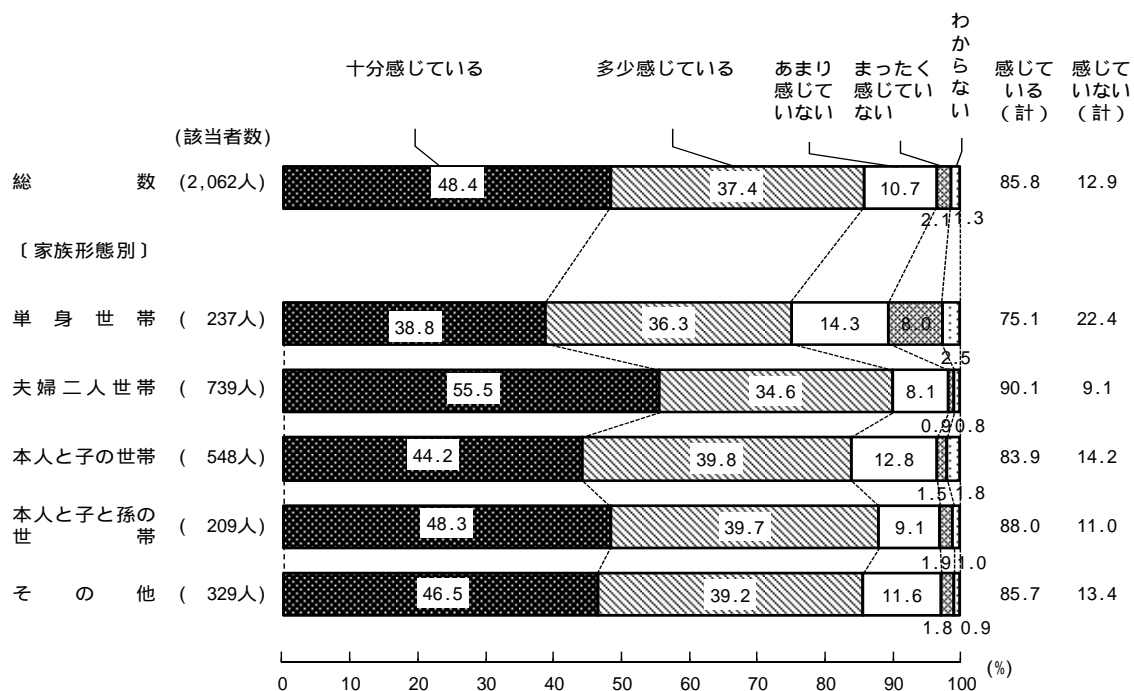
(1) 基本的な生活

現在、どの程度生きがい(喜びや楽しみ)を感じているかについてみると、「十分感じている」と「多少感じている」を合わせた「感じている(計)」は85.8%となっている。一方、「まったく感じていない」と「あまり感じていない」を合わせた「感じていない(計)」は12.9%となっている。家族形態別にみると、「感じている(計)」は夫婦二世帯が最も高い(90.1%)が、単身世帯では「感じていない(計)」が2割を超えている。

Q1「あなたは、現在、どの程度生きがい(喜びや楽しみ)を感じていますか。この中から1つだけお答えください。」

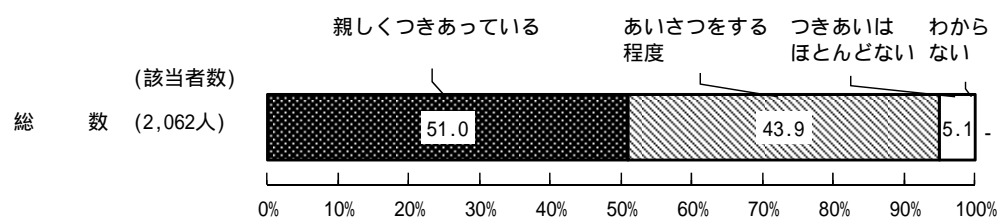


(家族形態別)

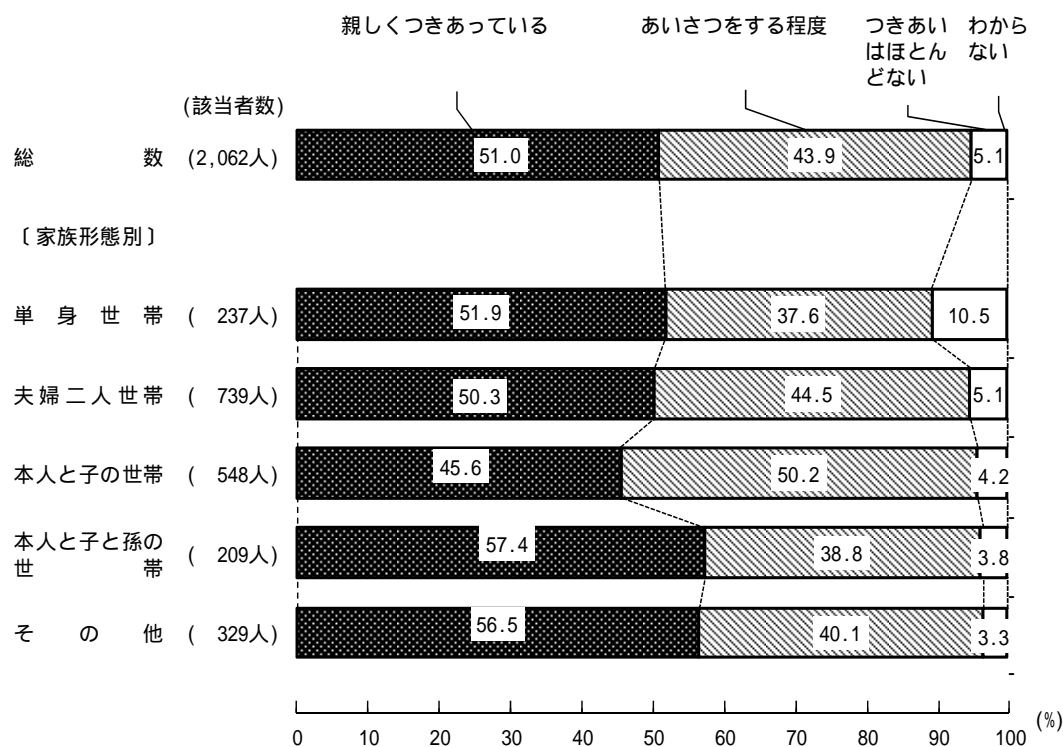


ふだんの近所の人とのつきあいの程度についてみると、「親しくつきあっている」が51.0%で半数を超え、「あいさつをする程度」は43.9%となっている。「つきあいはほとんどない」は5.1%にとどまっているが、家族形態別にみると、単身世帯では「つきあいはほとんどない」が1割を超えている。

Q2「あなたは、ふだん、近所の人とどの程度のつきあいをしていますか。この中から1つだけお答えください。」

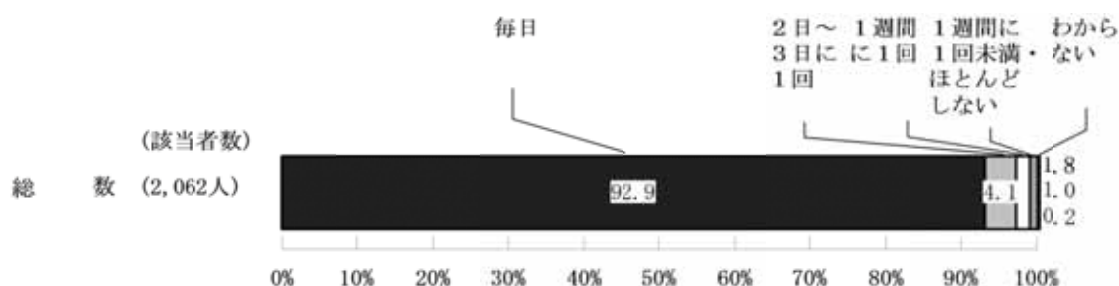


(家族形態別)

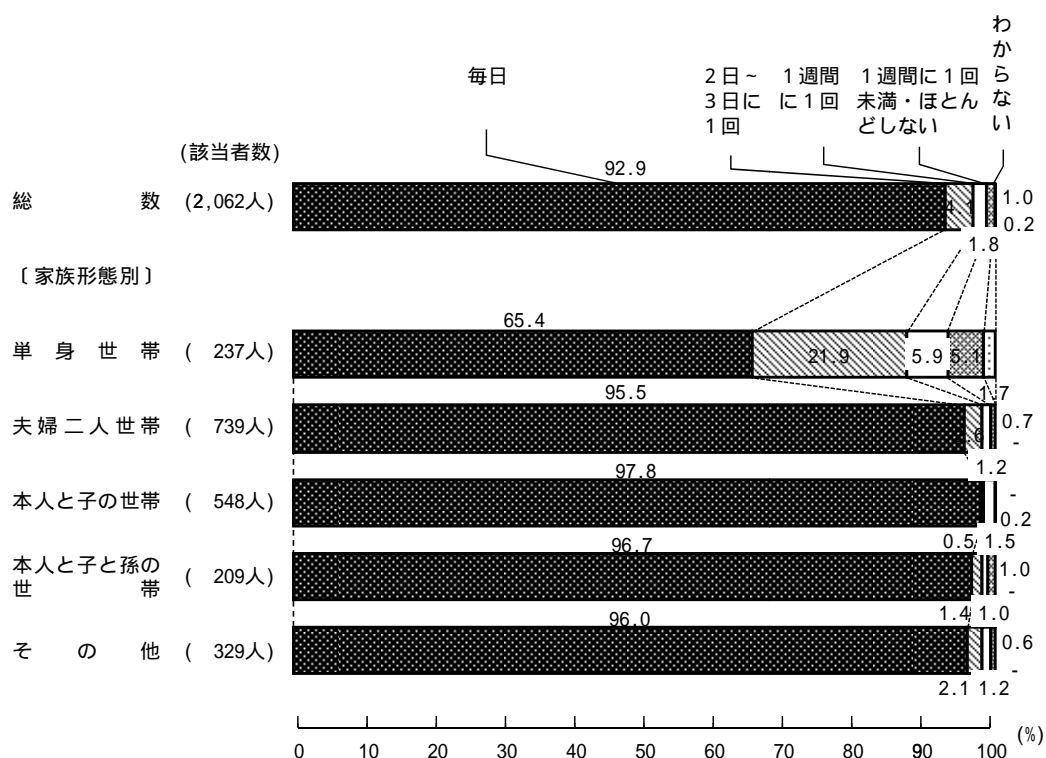


ふだんの電話やEメールを含めての会話の頻度についてみると、「毎日」が92.9%で大多数を占めている。家族形態別にみると、単身世帯を除く世帯で「毎日」会話をしている人が9割台後半を占めているのに対し、単身世帯では「毎日」が65.4%にとどまっている。

Q6「あなたは、ふだんの程度、人（同居の家族を含む）と話をしますか。電話やEメールも含めてお答えください。」

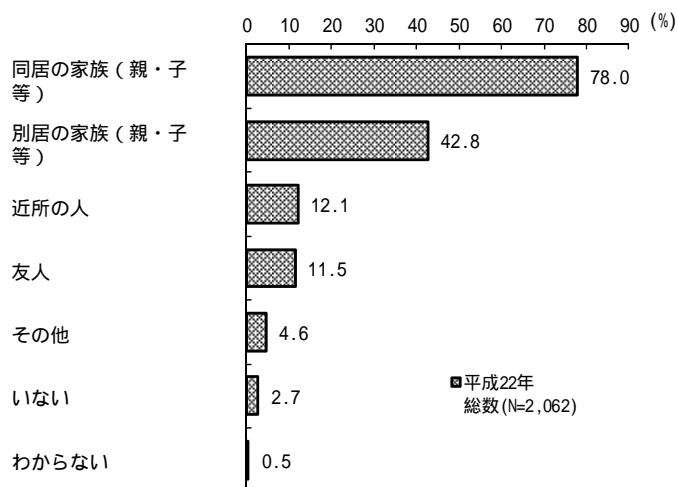


(家族形態別)

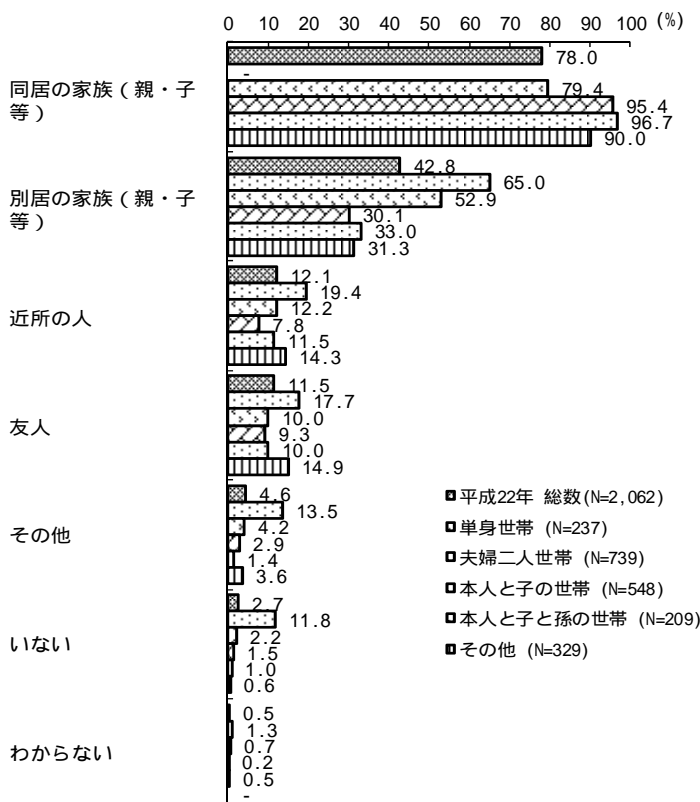


頼れる人の有無についてみると、「同居の家族（親・子等）」が78.0%で最も高く、次いで、「別居の家族（親・子等）」が42.8%、「近所の人」が12.1%、「友人」が11.5%の順となっている。家族形態別にみると、単身世帯では、「別居の家族（親・子等）」で65.0%に達し、「いない」も他の家族形態に比べて高くなっている。

Q7「あなたは、病気の時や、一人ではできない家の周りの仕事の手伝いなどについて頼れる人はいますか。あてはまるものをすべてお答えください。」(複数回答)

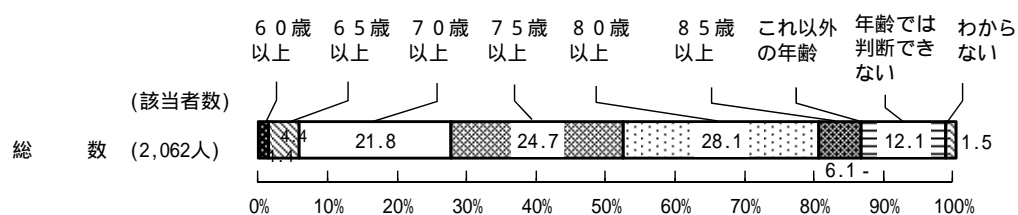


(家族形態別)



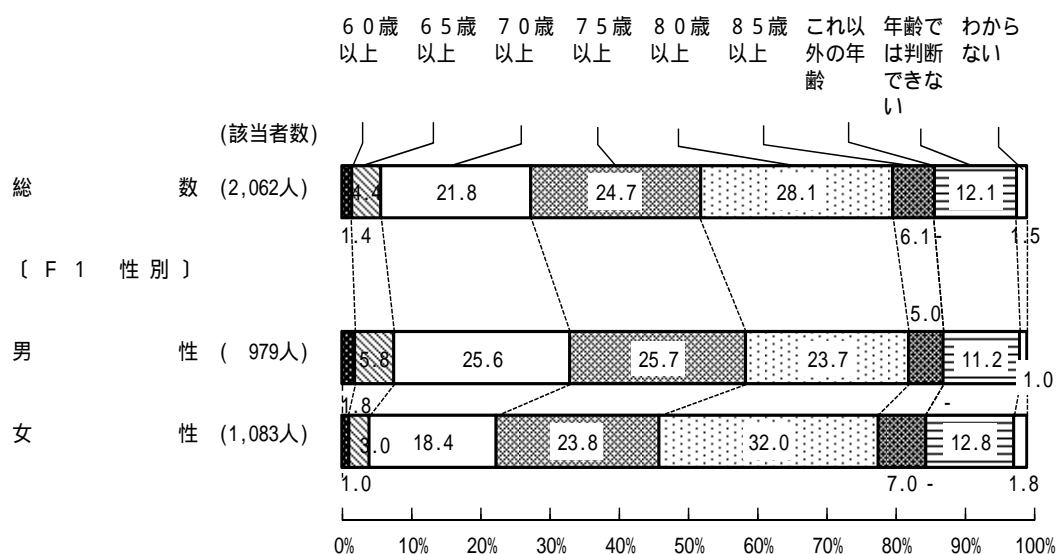
支えられるべき高齢者の年齢についてみると、「80歳以上」と回答した者の割合が28.1%で最も多く、次いで「75歳以上」の24.7%となっている。男女別にみると、男性は「70歳以上」と「75歳以上」の合計が半数以上であるのに対し、女性は「75歳以上」と「80歳以上」の合計が半数以上となるなど、女性の方が男性より高い年齢を答えている。

Q 8 「あなたは、一般的に支えられるべき高齢者とは何歳以上だと思いますか。」



(注) 「これ以外の年齢」は、選択肢にはあるが回答者(割合)が0(0%)

(男女別)

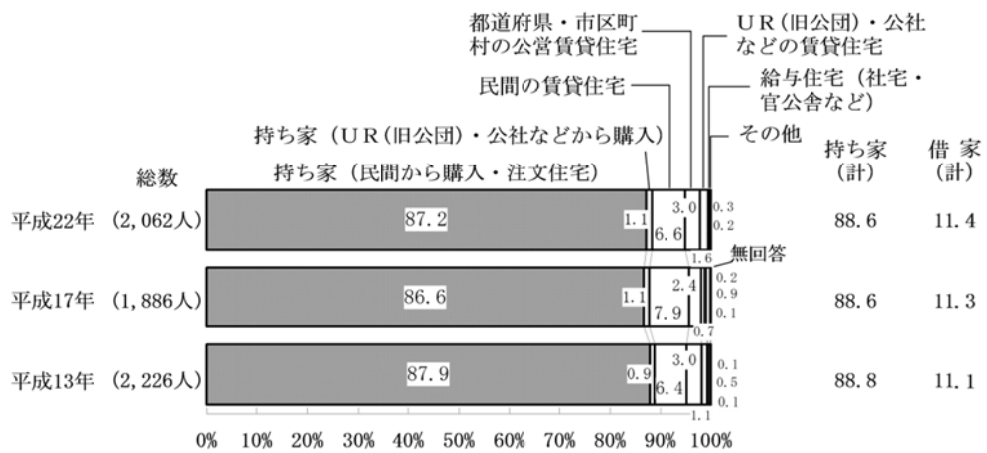


(注) 「これ以外の年齢」は、選択肢にはあるが、回答者(割合)が0(0%)

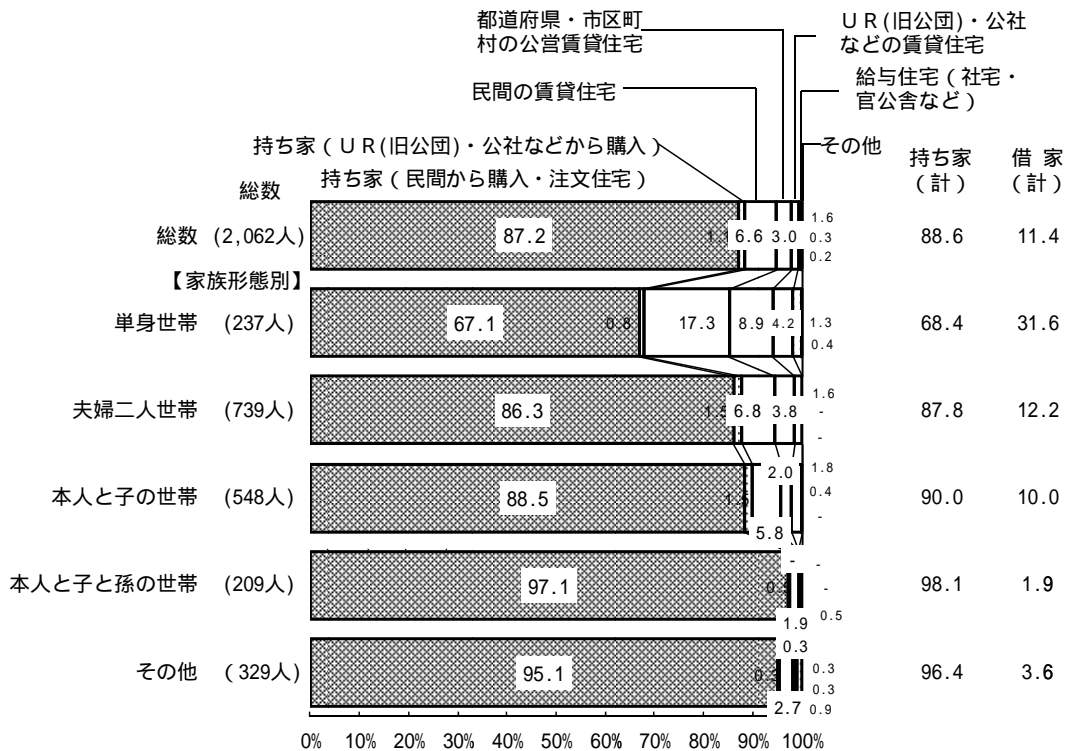
(2) 住宅の状況

住宅の種類は「持ち家」と回答した者が 88.6%と 9 割近いが、家族形態別に見ると、単身世帯では「借家」の割合が 31.6%と他の家族形態に比べてかなり高い割合となっている。

Q11 「あなたのお住まいは、この中ではどれにあたりますか。」

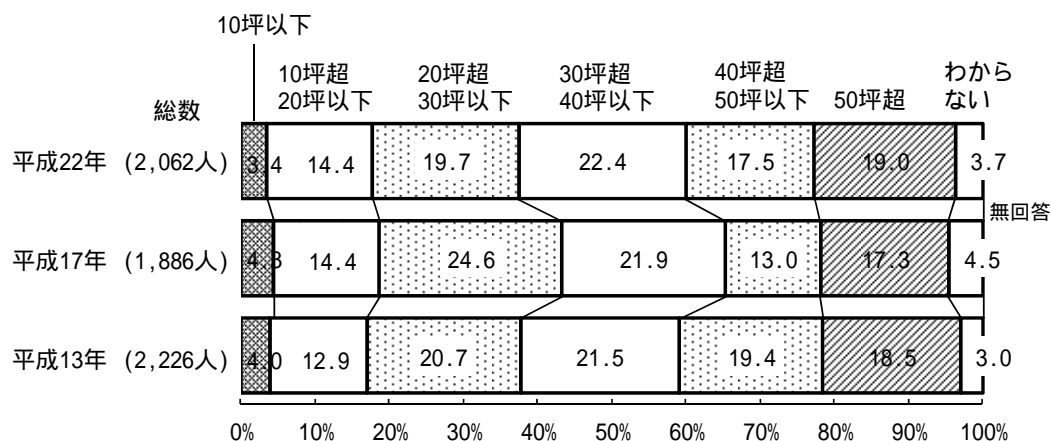


(家族形態別)

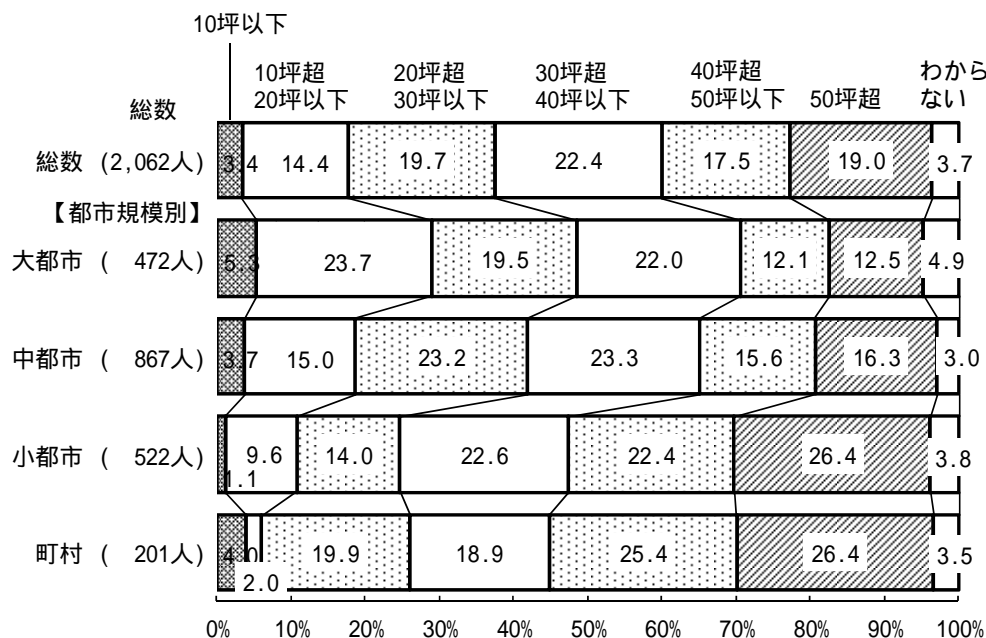


住宅の広さについてみると、「30坪超 40坪以下」が22.4%で最も多い。都市規模別にみると、都市規模が大きくなるほど住宅が狭くなる傾向がみられ、20坪以下は町村では6.0%に過ぎないが、大都市では約3割に達している。

Q14 「あなたのお住まいの広さは、だいたいどのくらいですか。」



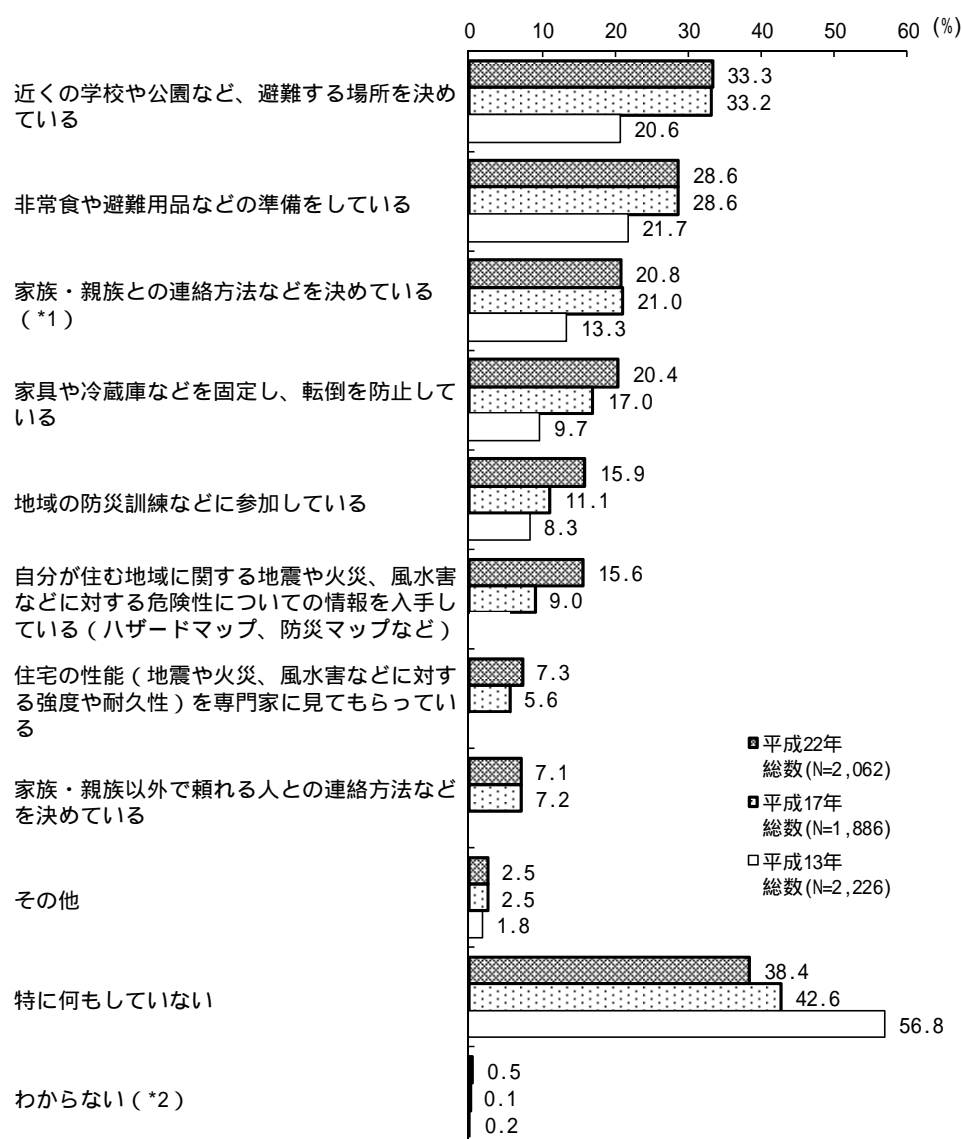
(都市規模別)



(3) 災害に備えてとっている対策

地震等の災害に備えてとっている対策についてみると、「特に何もしていない」と回答した者の割合が過去の調査と比較すると減少しているが、家族形態別にみると、単身世帯で「特に何もしていない」者が半数以上と高くなっている。さらに、健康状態別にみると、健康状態が良くない人ほど「特に何もしていない」の割合が高くなっており、「あまり良くない」人や「良くない」人では5割前後に達している。

Q17「お宅では、地震などの災害に備えて、どのような対策をとっていますか。あてはまるものをすべてあげてください。」(複数回答)

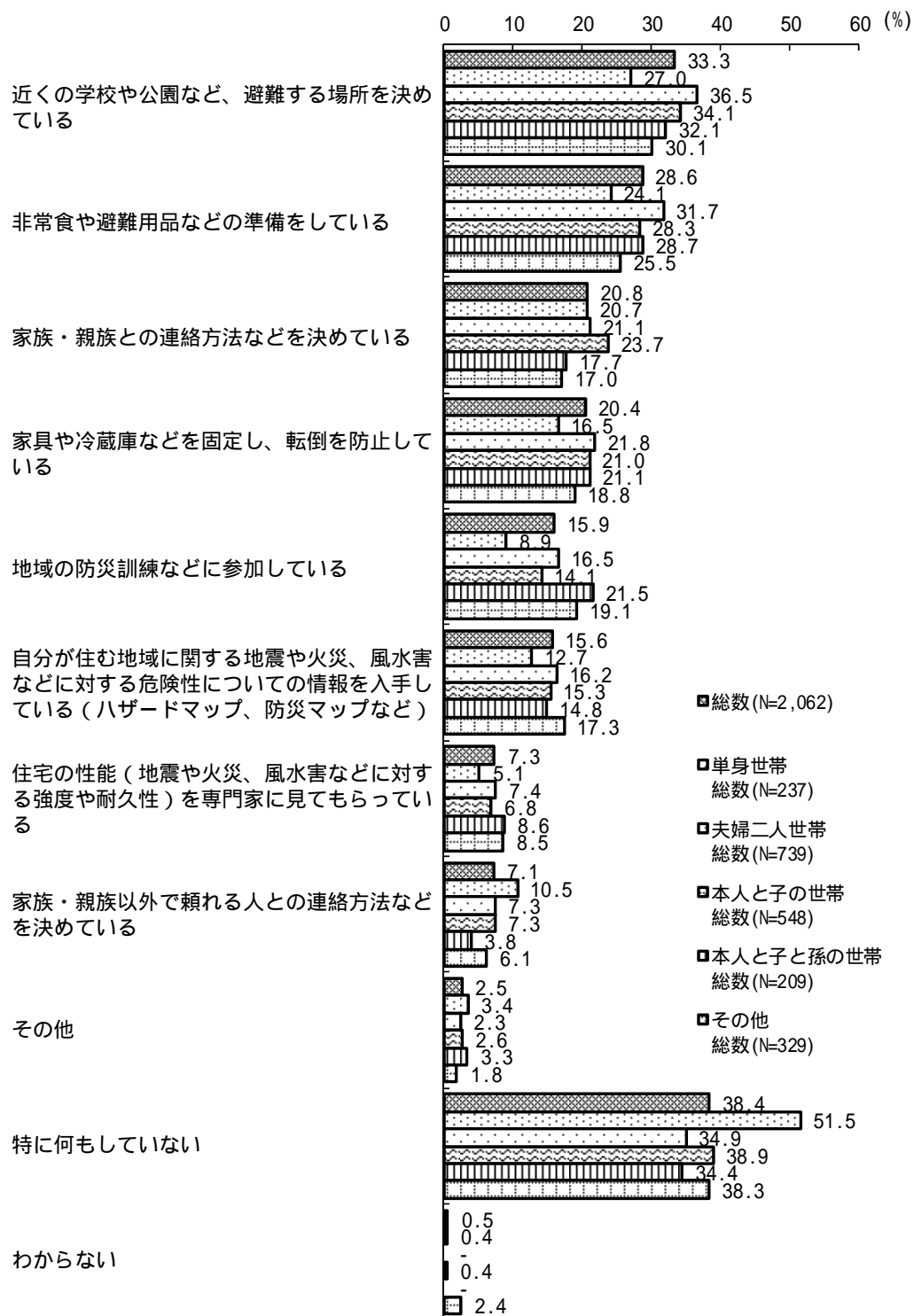


(注) は調査時に選択肢がなく、データが存在しないもの

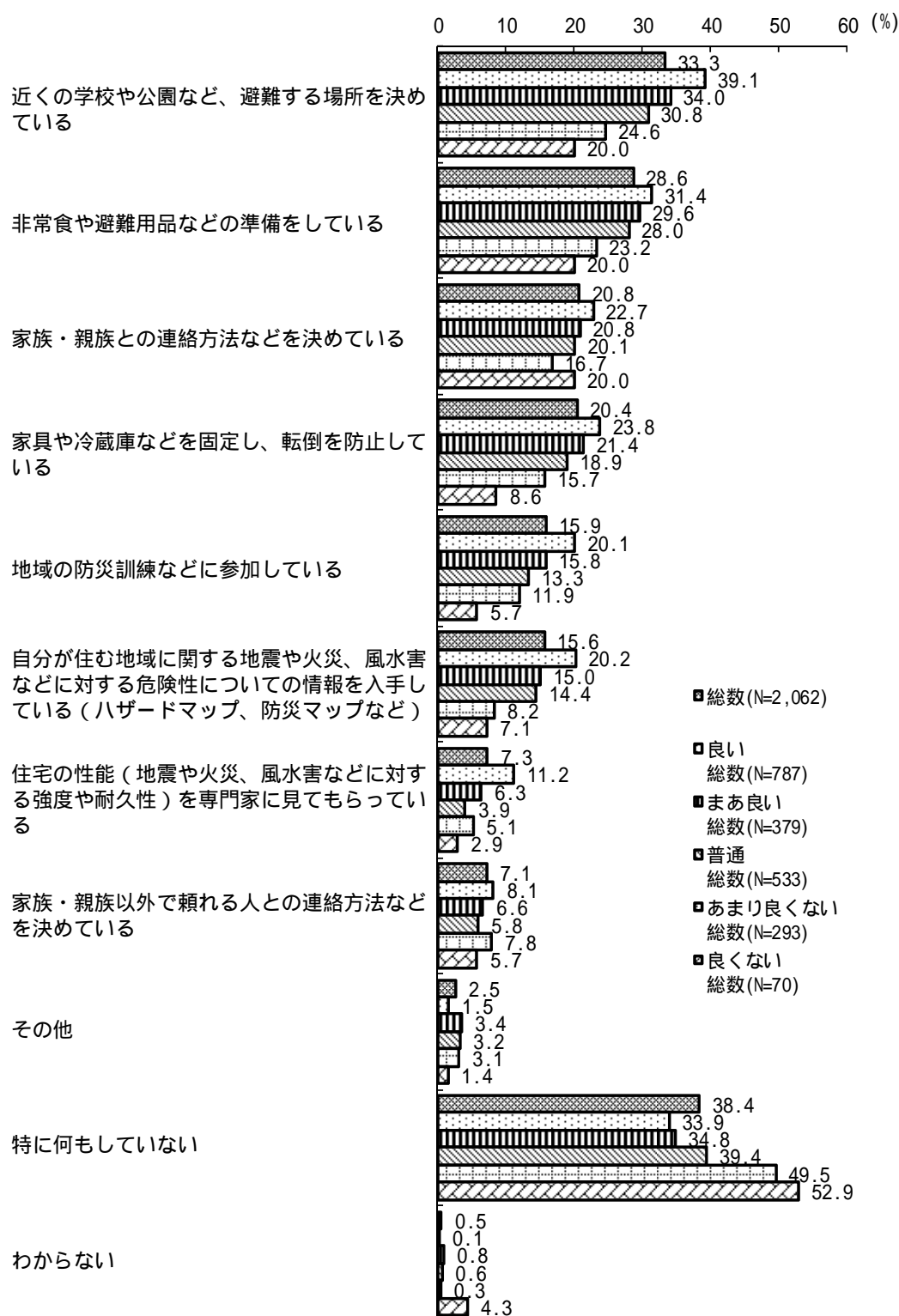
(*1) 平成13年は「家族との連絡方法などを決めている」

(*2) 平成13、17年は「無回答」

(家族形態別)



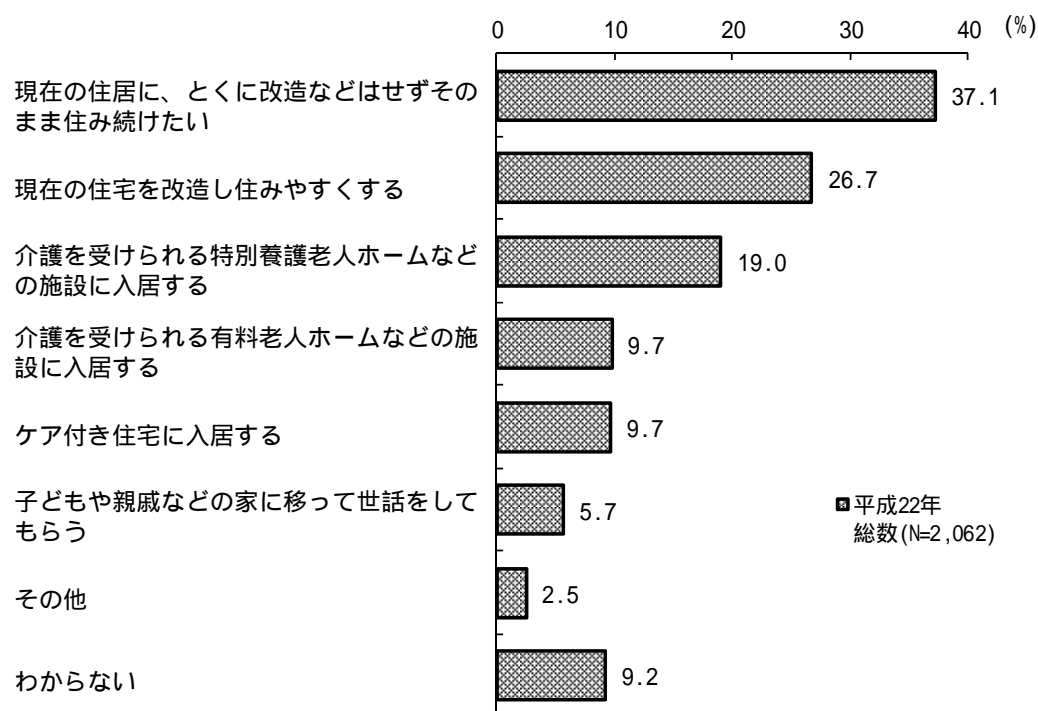
(健康状態別)



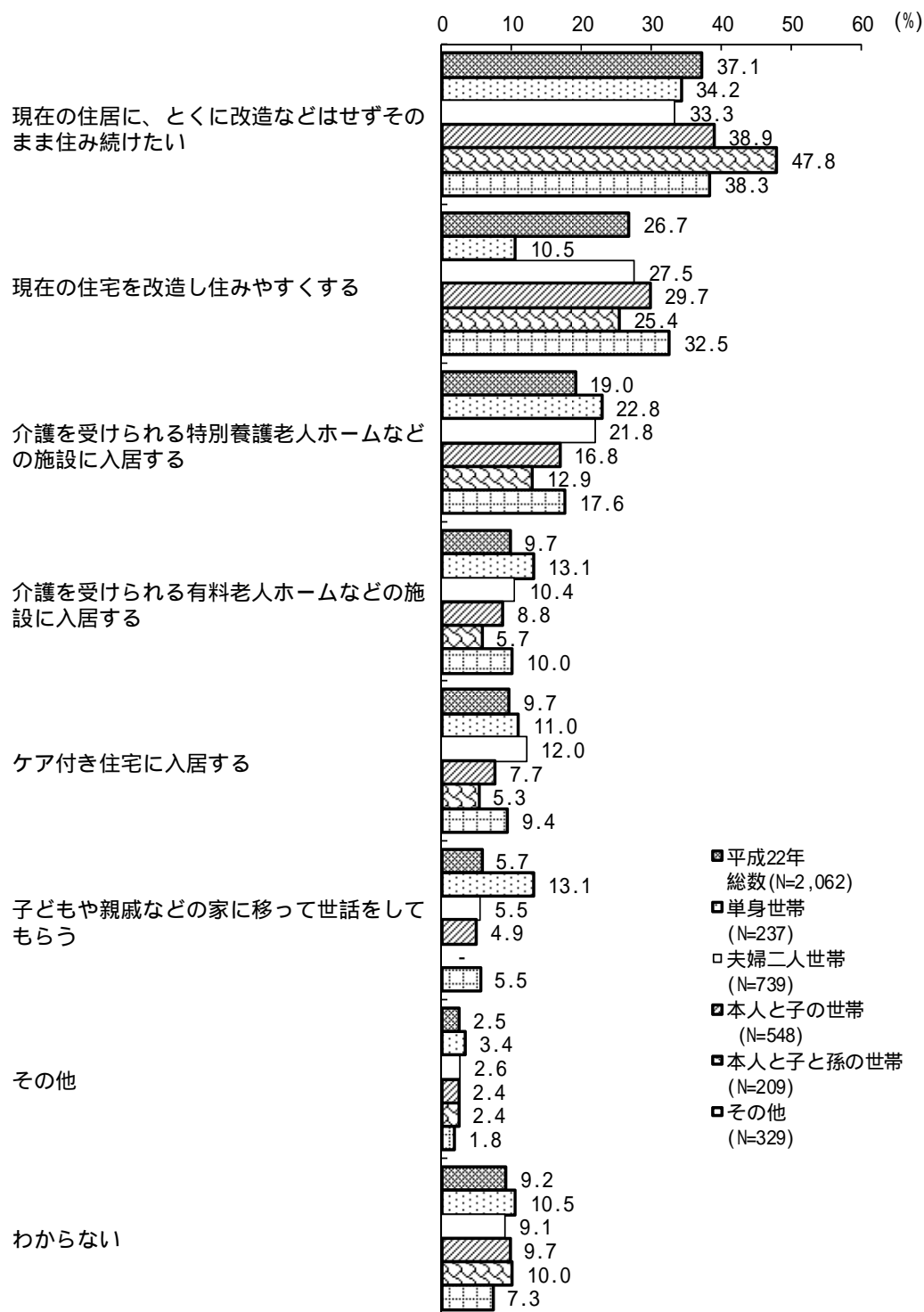
(4) 虚弱化したときの居住形態

自分の身体が虚弱化したときに住まいをどのようにしたいと思うかについてみると、「現在の住居に、とくに改造などはせずそのまま住み続けたい」が37.1%と最も高く、次いで、「現在の住居を改造し住みやすくする」が26.7%、「介護を受けられる特別養護老人ホームなどの施設に入居する」が19.0%の順となっている。家族形態別にみると、単身世帯では、「介護を受けられる特別養護老人ホームなどの施設に入居する」が選択肢の中で2番目に高い割合となっている。

Q25「あなたは、もし、身体が虚弱化してきたら、お住まいをどのようにしたいと思いますか。あてはまるものをすべてあげてください。(複数回答)」



(家族形態別)

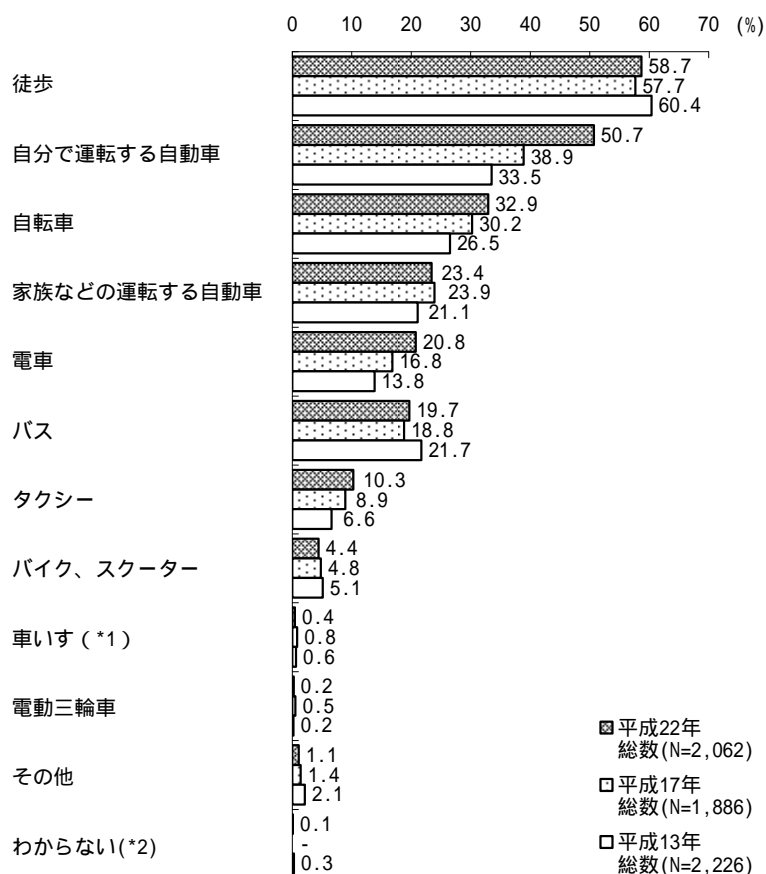


(5) 外出の状況

外出に利用する手段についてみると、「徒歩」が 58.7%と最も高いが、「自分で運転する自動車」と回答した者の割合が増加傾向にある。また、「自分で運転する自動車」は都市規模が小さくなるほど割合が高くなる。

「自分で運転する自動車」と回答した者の今後の運転に関する意向についてみると、年齢や視力の低下などによる運転の支障等を理由に運転をやめようと思っている者の割合が8割以上であるが、その一方で年齢や身体的な支障の有無にかかわらず、車の運転を続けると回答した者の割合が14.8%となっている。

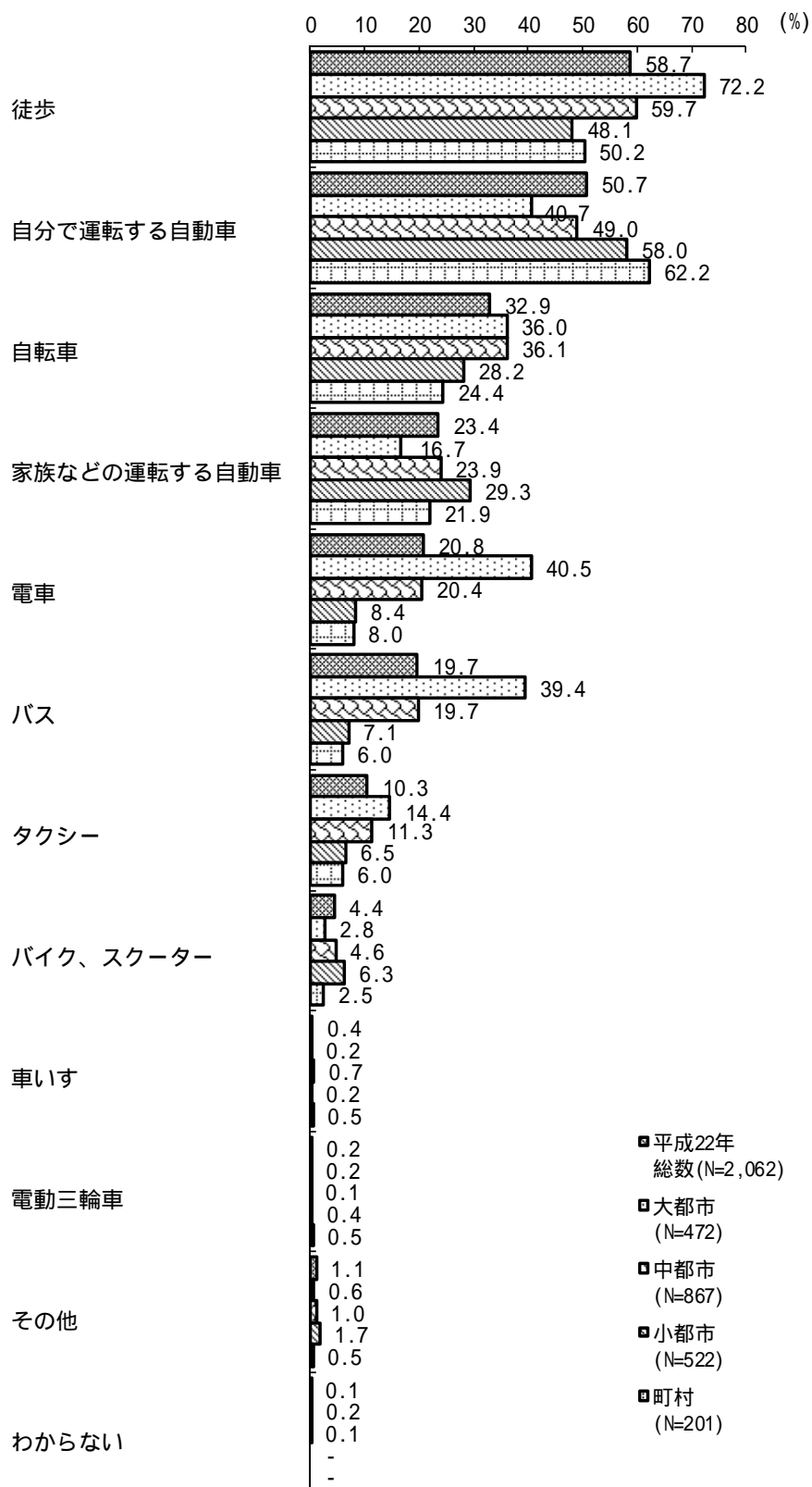
Q35 「あなたが外出する際、利用する手段は何ですか。あてはまるものをすべてあげてください。」(複数回答)



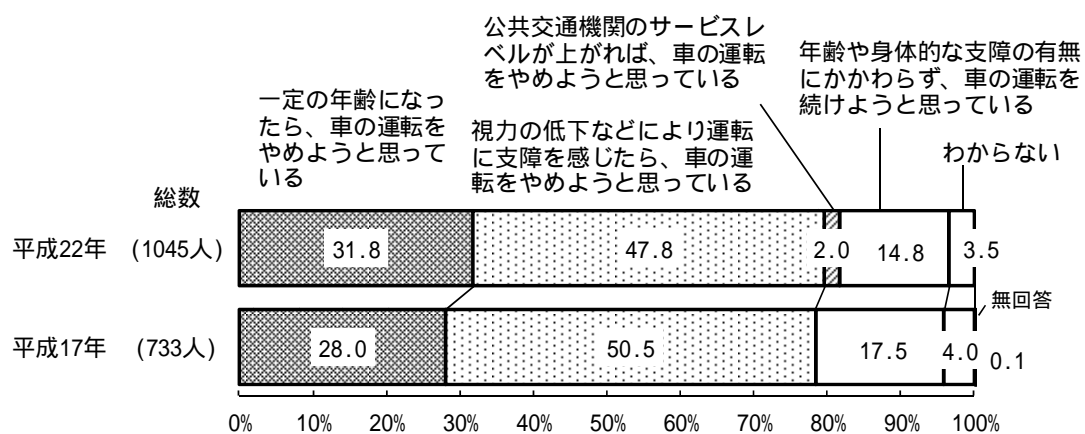
(*1) 平成7年は「車椅子・電動車椅子」

(*2) 平成13、17年は「無回答」

(都市規模別)



Q35SQ2「今後、車を運転することについて、あなたはどのようにお考えですか。あなたのお考えに最も近いものを、この中から1つだけお答えください。」

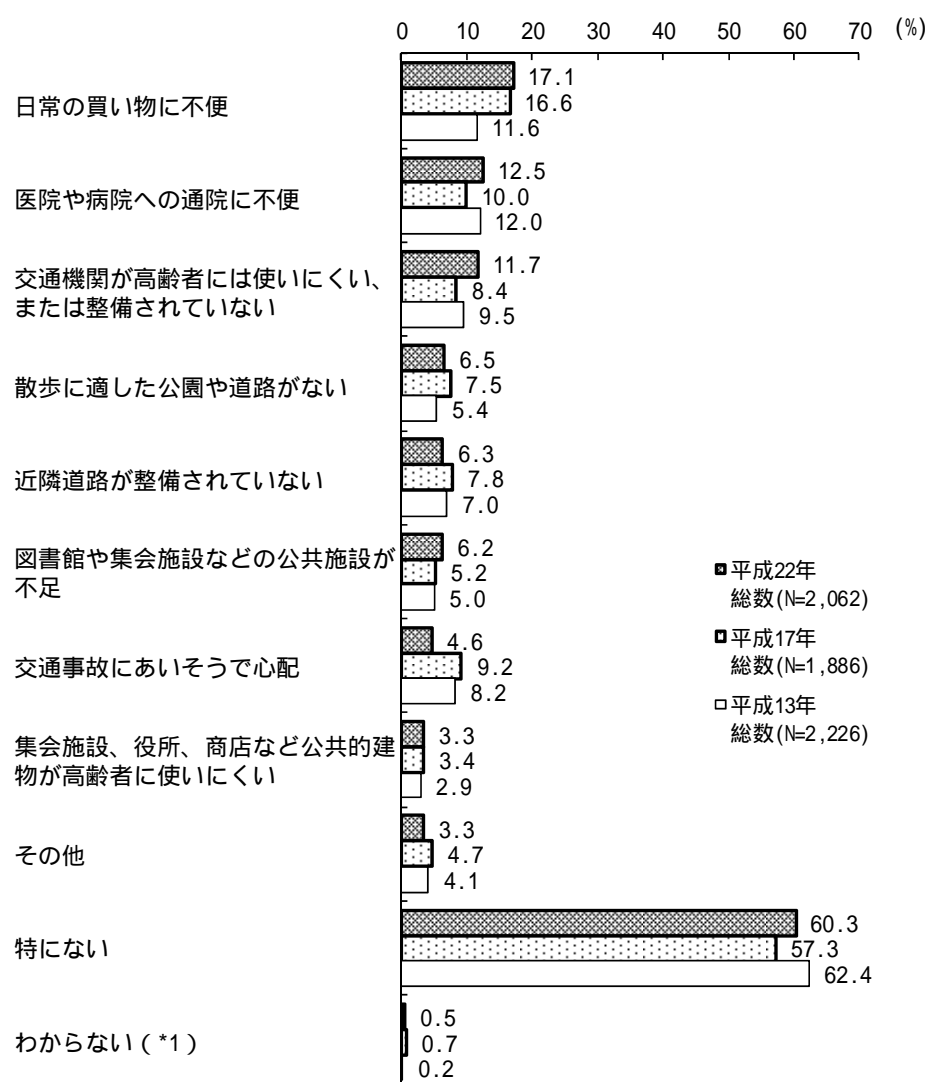


(注) は平成17年調査時に選択肢がなく、データが存在しないもの

(6) 地域の不便な点

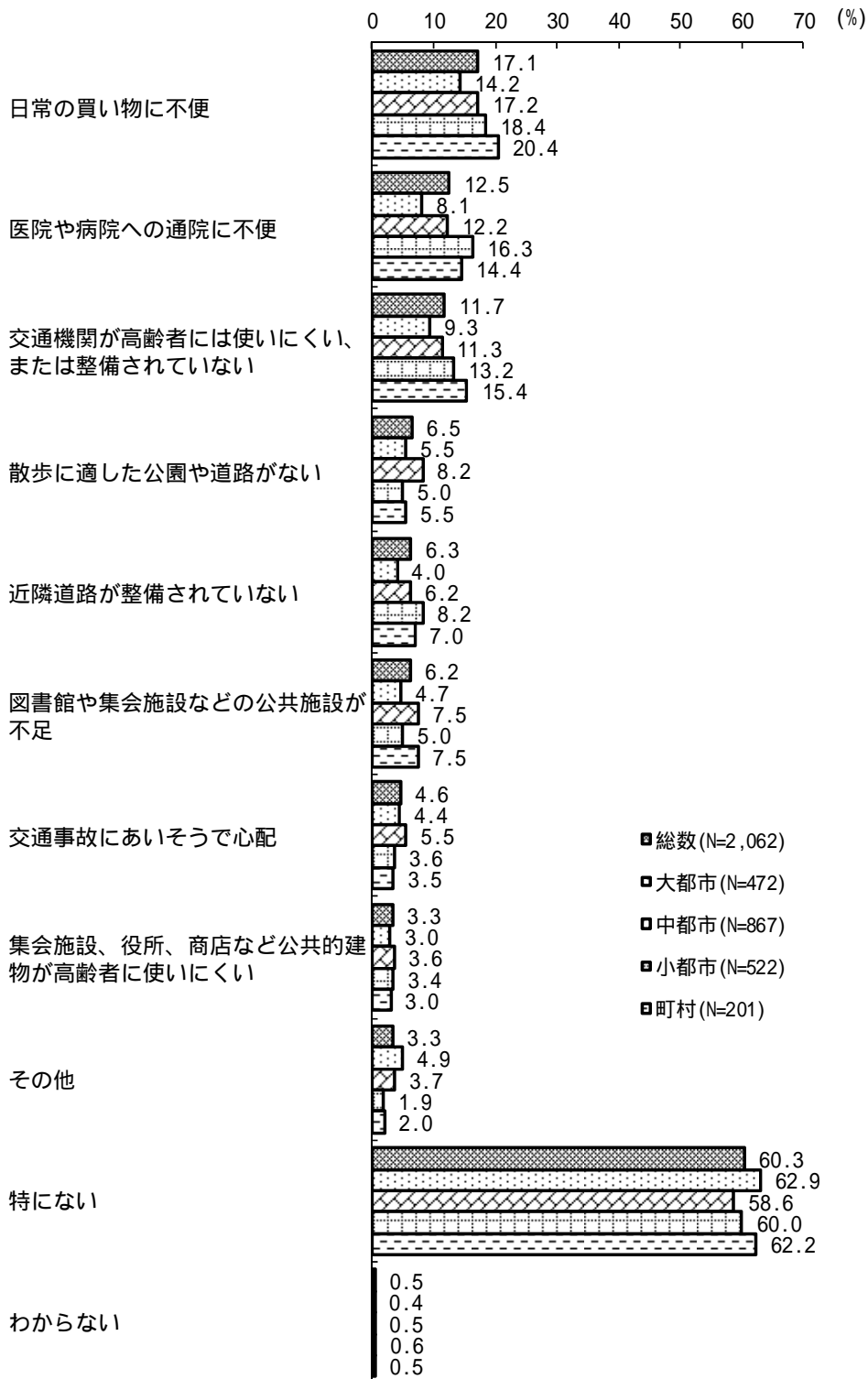
地域の不便な点についてみると、「特にない」とする者が6割を占めているものの、「日常の買い物に不便」、「医院や病院への通院に不便」との日常生活に不可欠な事柄に対する不便さを感じている者も多い。また、「日常の買い物に不便」、「交通機関が高齢者には使いにくい、または整備されていない」、「医院や病院への通院に不便」は都市規模が小さいほど割合が高くなる傾向にある。

Q36「あなたのお住まいの地域で、不便に思ったり、気になったりすることはありますか。あてはまるものをすべてあげてください。」(複数回答)



(*1) 平成13、17年は「無回答」

(都市規模別)

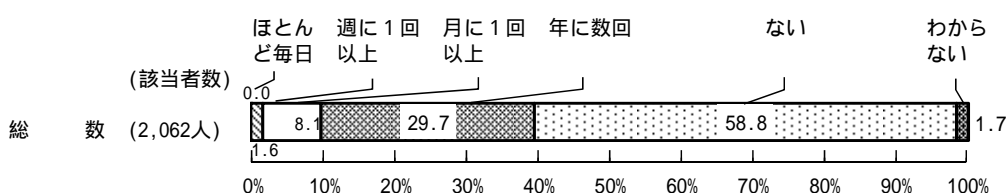


(7) 消費生活について

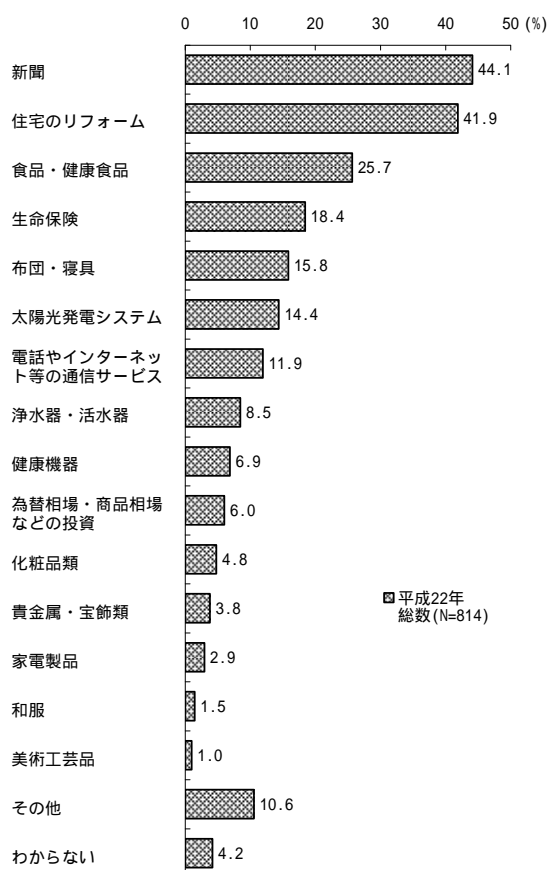
過去1年間の訪問販売を受けた経験についてみると、約4割の者が訪問販売を経験している。

また、訪問販売を受けた経験がある者のその内容についてみると、「新聞」と「住宅のリフォーム」が圧倒的に多い。都市規模別にみると、「新聞」、「住宅のリフォーム」、「生命保険」が大中都市で高い傾向がみられ、一方「食品・健康食品」、「布団・寝具」、「健康機器」が小都市及び町村で高い傾向がみられる。

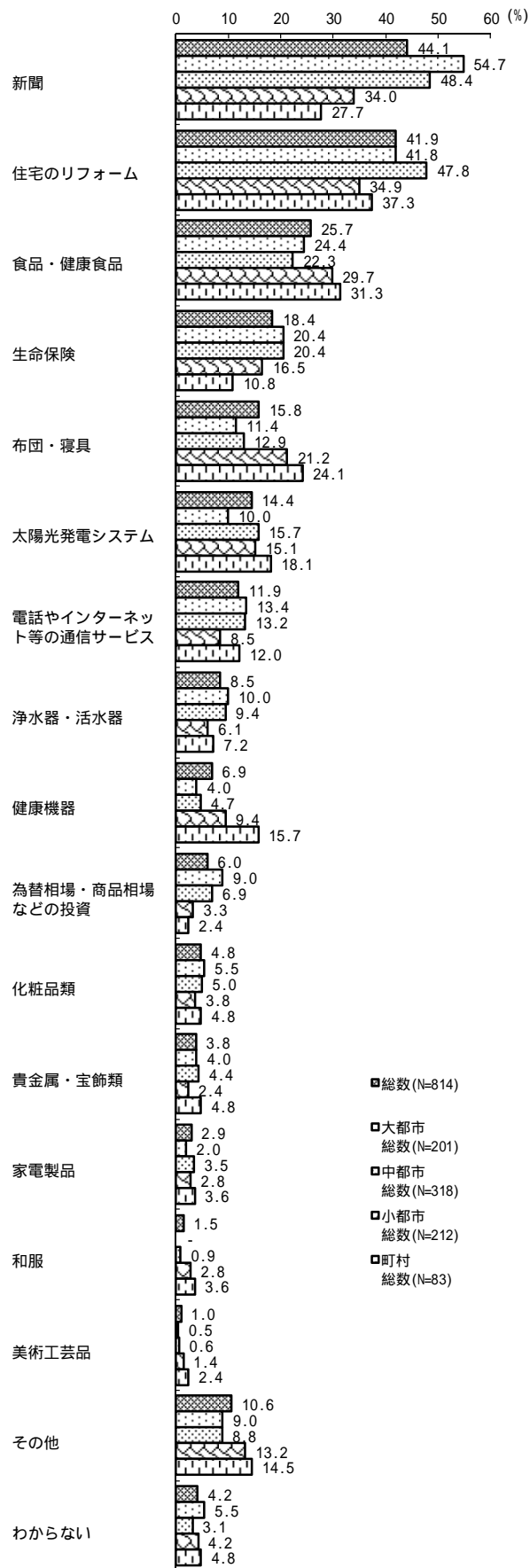
Q38 「あなた又はあなたの配偶者（夫・妻）の方は、過去1年間で、訪問販売を受けたことがありますか。」



Q38SQ1 「訪問販売を受けた商品やサービスは何ですか。あてはまるものをすべてあげてください。」(複数回答)



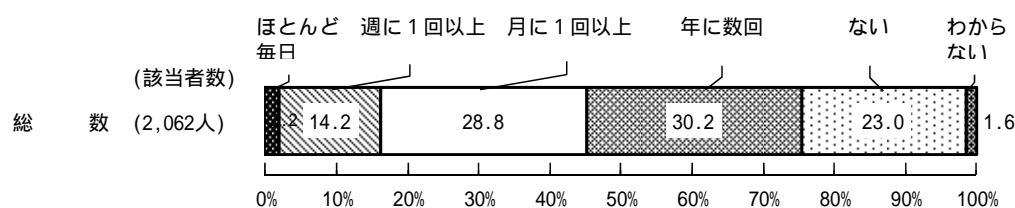
(都市規模別)



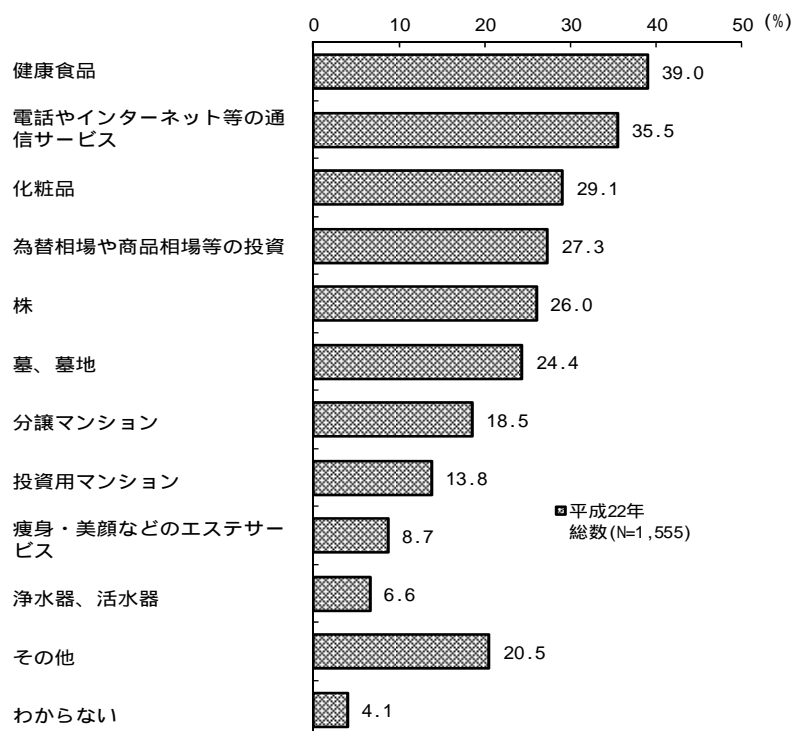
過去1年間の電話による勧誘販売を受けた経験についてみると、4人に3人が電話による勧誘販売を経験している。

また、電話による勧誘販売を受けた経験がある人のその内容についてみると、「健康食品」が最も多く、次いで「電話やインターネット等の通信サービス」、「化粧品」、「為替相場や商品相場等の投資」、「株」、「墓、墓地」と続く。さらに、都市規模別にみると、「為替相場や商品相場等の投資」、「墓、墓地」、「分譲マンション」、「投資用マンション」が大都市で高い傾向がみられ、一方「健康食品」が町村で高い傾向がみられる。加えて、男女別にみると、「為替相場や商品相場等の投資」、「株」が男性で高い傾向がみられ、「健康食品」、「化粧品」、「痩身・美顔などのエステサービス」が女性で高い傾向がみられる。

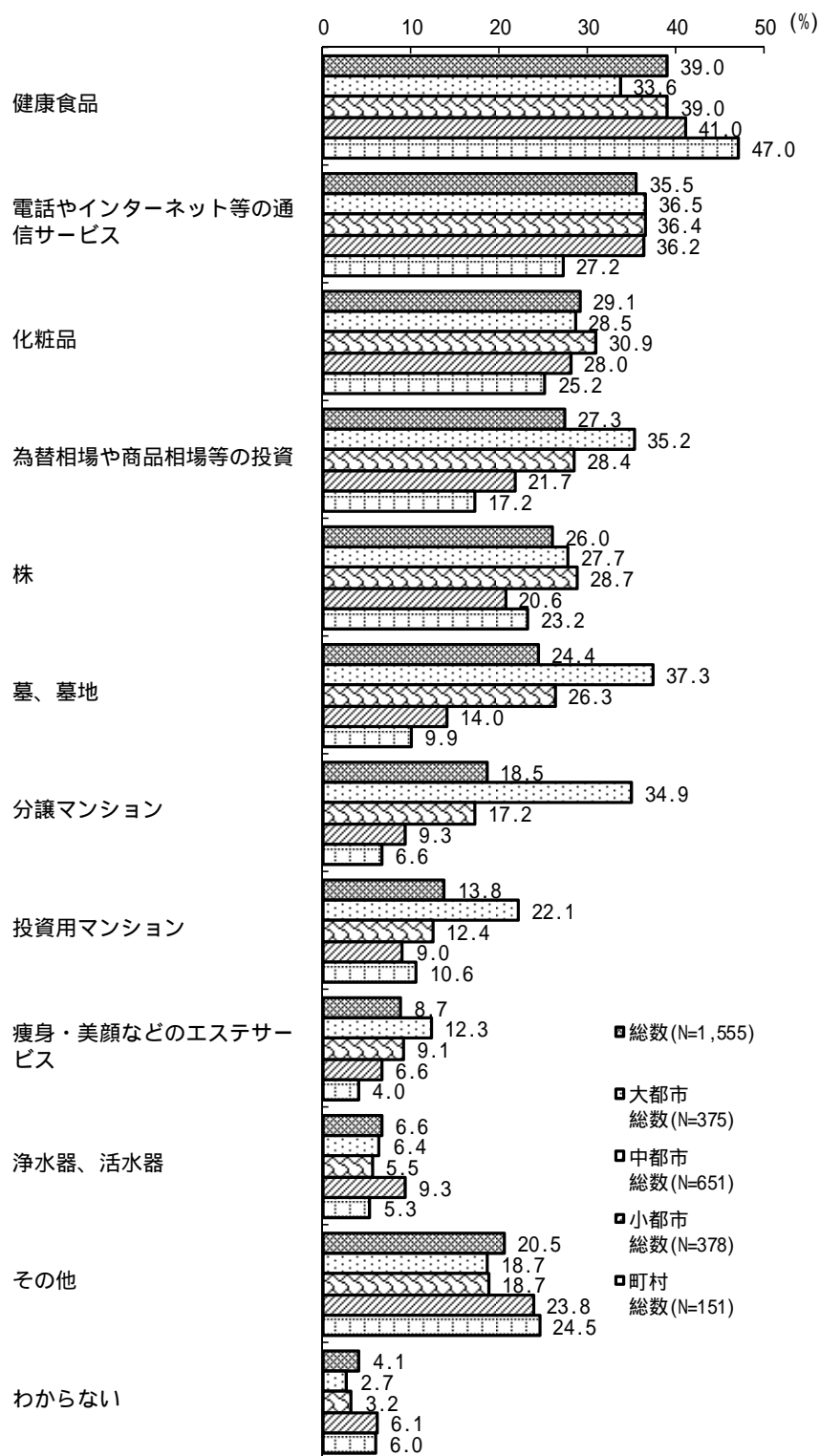
Q39「あなた又はあなたの配偶者（夫・妻）の方は、過去1年間で、商品やサービスの購入を勧誘する電話（以下、「電話勧誘販売」という）を受けたことがありますか。」



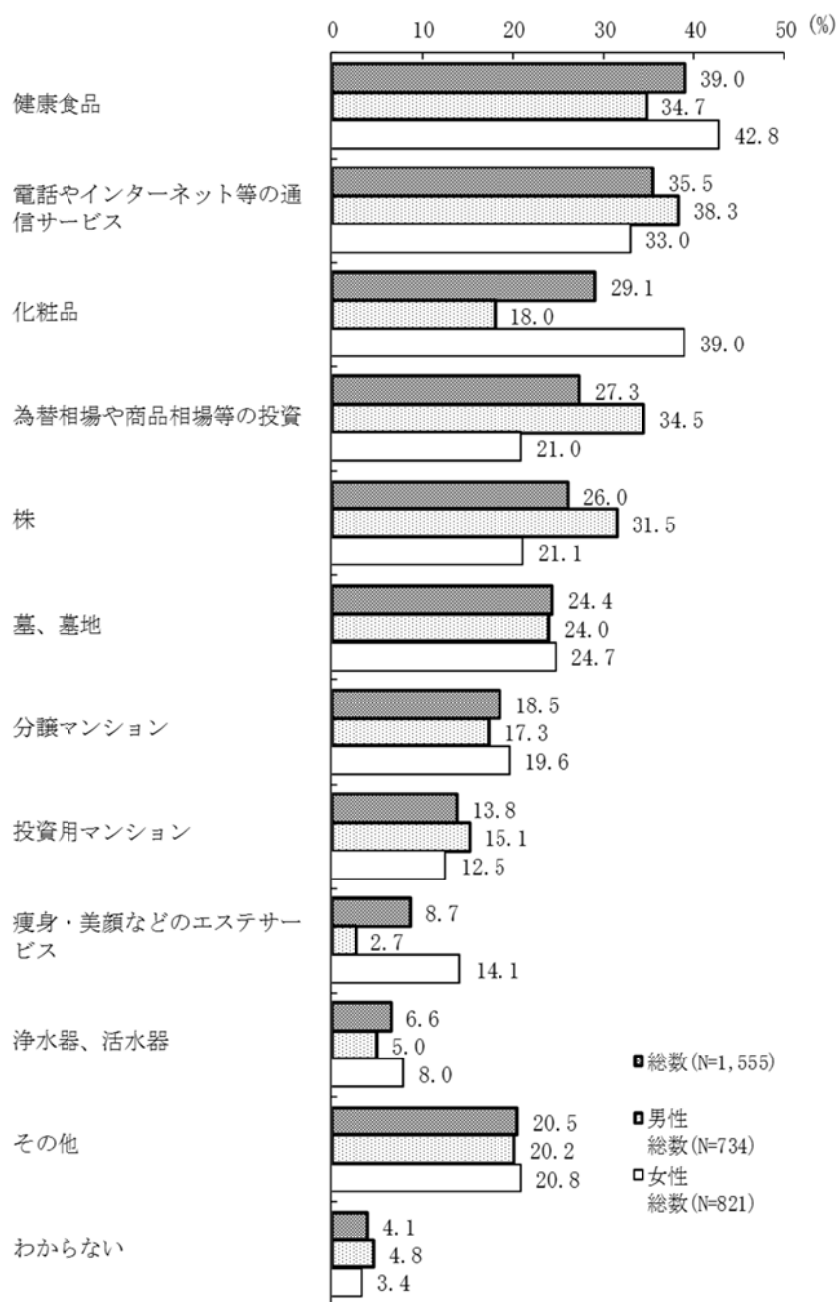
Q39SQ1「電話勧誘販売を受けた商品やサービスは何ですか。あてはまるものをすべてあげてください。」(複数回答)



(都市規模別)

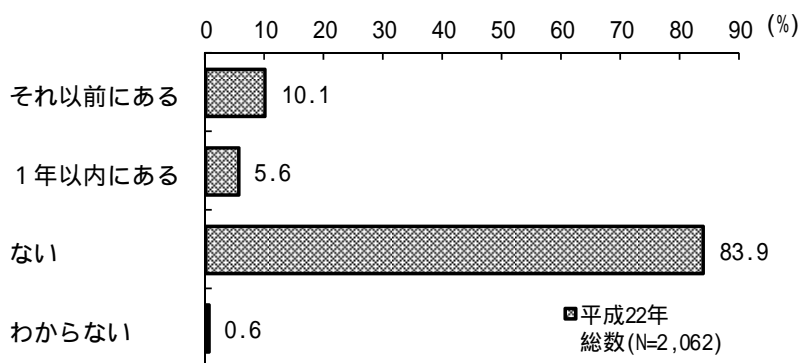


(男女別)



振り込め詐欺と思われる電話を受けた経験についてみると、経験がない者が83.9%であり、経験のある者（「1年以内にある」または「それ以前にある」と回答した者）は15.6%となっている。また、都市の規模が大きくなるほど経験している割合が高い傾向にある。

Q40「あなたは、振り込め詐欺と思われる電話を受けたことがありますか。」（複数回答）



（都市規模別）

